

聖書：ルツ記 4：1～22

説教題：ダビデの父エッサイの父

日時：2015年6月14日

ルツ記の最終章。いよいよクライマックスの章となります。前の3章でルツはボアズにプロポーズしました。しかし前回見た通り、それは男女が互いに惹かれ合い、愛を告白する単なるロマンティックなラブストーリーではありませんでした。そこで私たちが見たのは、登場人物たちがそれぞれ他者を思いやって行動しているということでした。まず姑のナオミは嫁ルツの幸せを心にかけていました。彼女はルツに大胆な提案をしました。体を洗い、香水をつけ、晴れ着をまとい、打ち場で寝ているボアズのところへ行け、と。これはボアズに対する深い信頼なしにできる提案ではありませんでした。一方、嫁のルツが心に覚えていたのは姑の幸せでした。まだ若いルツはもっと魅力的な若い男性を結婚相手に選べたのに、そうしなかったのは姑ナオミの幸せを優先したからでした。そしてボアズも真夜中に突然のプロポーズを受けても舞い上がることなく、きちんとルツの心を見て取ることができる人でした。彼はこの結婚が何を意味するか理解していました。姑ナオミの扶養、エリメレクの土地の買い戻し、その家系の子孫を残すこと…。人間的な言い方をすれば、この結婚には色々なことがついて来ます。しかし彼は主の御心なら喜んで買い戻しの権利のある親類としての役割を果たそうとしています。このように登場人物たちは皆、お互いのことを思って自らをささげていました。ルツ記に特徴的なテーマの一つは主の摂理ですが、彼らはどうしたら私は主によって幸運をつかめるか、という自分のことばかりに一生懸命で、他人のことなど眼中にないという態度ではありませんでした。むしろ主の主権を信じて、隣人のために心と体を用いています。そこにこの書の美しさの所以があると言わべきでしょう。

さてボアズはルツのプロポーズを受け入れましたが、前の章で見ましたように、彼よりも優先する買い戻しの権利を持つ親類がいました。そこでボアズはその親類と話し合う場を設定します。当時、町の門は広場のようになっていて、人々が色々な話をしたり取り引きしたりする場所でもありました。また公の法廷の役割も果たしたようです。そこへ、あの買い戻しの権利を持つ親類が通りかかります。ボアズはその人にまず第1の質問をします。「モアブの野から帰って来たナオミは、私たちの身内のエリメレクの畑を売ることにしています。私はそれをあなたの耳に入れ、ここにすわっている人々と私の民の長老たちとの前で、それを買いなさいと、言おうと思ったのです。

もし、あなたがそれを買い戻すつもりなら、それを買い戻してください。しかし、もしそれを買い戻さないなら、私にそう言って知らせてください。あなたをさしおいて、それを買い戻す人はいないのです。私はあなたの次なのですから。」ナオミは貧しさゆえに、夫エリメレクの畑を手放さざるを得ない状況にありましたが、できることなら他人の手に渡るより、買い戻しの権利を持つ近い親類によって買い戻された方が良い。そこでボアズは優先権を持つ親類に尋ねました。すると彼はあっさり「私が買い戻しましょう。」と言います。なぜ彼はこのように述べたのでしょうか。おそらくこれは損にはならない取り引きだと彼が考えたからでしょう。イスラエルでは50年ごとにヨベルの年と呼ばれる解放の年があり、その年には売られた土地も元の所有者に無償で返ることになっていました。ですから買い戻した人は一時的にその土地を所有しても、いつかはそれをもとの所有者に返さなければなりません。しかしエリメレクの家には後継ぎがいせんから、その土地は買い戻した親類のものとなる可能性が大了。今少々犠牲を払っても悪くない投資である。これはむしろ自分の土地を広げるチャンスであると彼は考えたのでしょう。

ボアズはそこでもう一つの言葉を付け加えます。5節：「そこで、ボアズは言った。『あなたがナオミの手からその畑を買うときには、死んだ者の名をその相続地に起こすために、死んだ者の妻であったモアブの女ルツをも買わなければなりません。』」ボアズがここで触れているのは、一般に「レヴィラート婚」と呼ばれる慣習です。すなわち、ある夫婦に子がいないまま、夫が死んだ場合、その夫の兄弟が残された妻と結婚して、子孫を残すようにするという制度です。申命記25章5節6節：「兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がいない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでにはならない。その夫の兄弟がその女のところに、はいり、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。」ここでしばしば議論になるのは、ボアズが買い戻しの権利のある親類にレヴィラート婚の務めを要求していることです。今見た申命記では、その義務を果たすのは亡き夫の「兄弟」と言われていました。買い戻しの権利を持つ親類は「兄弟」ではありませんから、厳密にはレヴィラート婚の務めを果たす義務はないはず。なのになぜボアズはそこまで要求できたのかという点です。しかし注目すべきは、買い戻しの権利を持つ親類はこの時、それとこれとでは話は違うとは言わなかったことです。彼はボアズの言い分を正当なものと認めています。これはどういうことでしょうか。確かに文字の上では、買い戻しの権利を持つ親類にここ

までのことは命じられていません。しかし買い戻しの権利を持つ人に期待されている役割は、不運な身内を顧み、自らがある程度の犠牲を払ってもその身内を助け、保護してあげることです。その律法の精神から考えると、文字で定められているのは土地に関することだと言って、それだけに関わり、その家族を顧みないままにいることは道義的に良いとは見られなかったのでしょうか。土地を買い戻すつもりがあるなら、そのあわれみの心で、その家族の問題全体にも心を配ることが期待される。

こうなると、先に「買い戻しましょう」と言った親類にとっては、話が違って来ます。ルツと結婚すれば姑ナオミの世話もしなければなりません。また子どもができれば、その子に亡き夫の名を継がせ、土地を返してやることになります。こうなると、当初予想したメリットは何もなくなります。それで彼は6節で先の言葉を撤回します。

「私には自分のために、その土地を買い戻すことはできません。私自身の相続地をそこなうことになるといけませんから。あなたが私に代わって買い戻してください。私は買い戻すことができませんから。」この彼の言葉が表わしていることは、買い戻しの役割には非常な犠牲が伴うということです。そしてこのやりとりによって逆に浮かび上がってくるのはボアズの献身でしょう。律法はこれを定めた神ご自身を反映しています。従って買い戻しの制度も、まず神ご自身が困窮している者、貧しい者を御心に留め、顧みて下さる方であることを示しています。ボアズはルツとの結婚の導きを主の前で考えた時、決して悪いくじを引くことになったという風には考えませんでした。彼は日々主との交わりに生き、主に感謝して歩む中で、主の導きなら喜んでこの律法に従う歩みをしようと思っただけです。単なる個人の損得勘定から物事を考えず、自分は与えられている状況の中で、神の前でどう歩むべきかという観点から考えて、律法に進んで従う道を選び取ったのです。

門にいた人々と長老たちはみな、この二人の結婚を祝福しました。11節で触れられているラケルとレアはイスラエル12部族の祖を産んだ妻たちです。そのようにルツが祝福されますように！と人々は祈った。また12節で触れられているタマルがユダに産んだペレッツの話は創世記38章に出てきますが、共通点はどちらもレヴィラート婚の制度と関係していることです。また18節からの系図に示されていますように、ベツレヘムの住民の多くはペレッツを先祖とする人たちだったのでしょう。私たちの先祖ペレッツが発展して来たように、そのようにあなたの家も祝福されますように！と人々は祈った。

さて、このように主を信じて御前に誠実に歩んだナオミ、ルツ、ボアズに、主はどんな祝福を与えて下さったかが、最後に記されています。まず一つ目はオベデの誕生

です。13 節に「主は彼女をみごもらせたので、彼女はひとりの男の子を産んだ。」とあります。ここで特に焦点が当てられているのは姑のナオミです。女たちは 14～15 節でナオミを祝福しています。また 16 節に「ナオミはその子を取り、胸に抱いて、養い育てた」とあります。これはルツ記の最初の章とは何と対照的でしょうか。ナオミは一章では多くの悲劇を経験して、私をナオミ（快い）とは呼ばないでマラ（苦しみ）と呼んで下さい、と言いました。「私は満ち足りて出て行きましたが、主は私を素手で帰されました」と言いました。しかし主権者を信じて御前に歩み、また嫁の幸せを心にかけて、そのために心砕いた彼女を主は捨てられなかった。ナオミは素手で帰されたと言いましたが、ここで女たちが言っているように、彼女には「7 人の息子にもまさる嫁ルツ」が与えられ、またそのルツを通して先には考えられなかったような祝福を頂いたのです。ですから私たちも「今」の暗さに失望して物事をあきらめてしまっただけでは足りないのです。人生は終わりになって見なければ分からないのです。ルツ記 1 章ですべてを判断することはできないのです。私たちも力強い主の主権を仰ぎ、御前に誠実に歩いて、主の導きを待ちたいのです。

二つ目の祝福は 18～22 節の系図です。ここにはボアズとルツの子であるオベデから、あのダビデ王が誕生した！と語られています。原文のヘブル語聖書のルツ記最後の言葉は「ダビデ」となっています。この書で見て来たナオミ、ルツ、ボアズの歩みが行き着いた先はあのダビデの誕生であった！これを考える際に思い起こす価値のあることは、このルツ記の時代は前に見た士師記の時代と同時代であったことです。すなわちイスラエルの暗黒時代と呼ばれる士師の時代です。人間の側には何も良いことがなく、いつ捨てられてもおかしくないような暗いイスラエルの時代。しかしその中でこのように歩んだ人たちを通してダビデ王の誕生が導かれて行ったのです。これは私たちに大きなチャレンジを与えるものではないでしょうか。私たちは時代が悪いから、周りの状況が良くないからと言って、それで自分は敬虔な信仰生活ができないかのような言い訳をすることはできないのです。ここに私たちよりもっとひどい時代にありながら立派に生きた人たちがいた。そしてその彼らを通してイスラエルの新しい時代は開かれて行ったのです。

そして今日の私たちはこれにもう一つのことを加えるべきでしょう。ルツ記の著者はこの系図によって、主の祝福は本人たちが知り得なかったとてつもない結果をもたらしたというメッセージを示しました。しかし私たちは言わなければならない。まだそれでも十分ではない。ルツ記の著者さえも知らないことがまだある、と。すなわちボアズ、ルツ、ナオミの生き方がもたらした結果はダビデの誕生だけではなく、もっ

と先のことにまでつながった。マタイの福音書 1 章にはイエス・キリストの系図が記されていますが、5 節にボアズ、ルツ、そしてオベデの名前が載っています。すなわちボアズとルツからやがてダビデ王が誕生したばかりでなく、さらに彼にまさるまことの王・救い主イエスキリストの誕生が導かれた。ルツ記の著者は主の摂理に対する驚きをもってルツ記を書き記したに違いありませんが、主の祝福はそれよりももっともっと遠くまで及んだのです。このことも先ほどのように語るなら、もっと意義あるものとなるでしょう。すなわちイスラエルの暗黒時代の中でこのように生きた人たちによって、私たちのまことの救い主の誕生は備えられて行ったということです。士師の時代は良いことが一つもなく、目を留めるべきことが一つもない時代ではなかった。目立たなく、地味なものではあったが、確かな光を放つ神の民の歩みがあったのです。このことを思うなら、私たちの周りの状況がどうであるかということとは関係ありません。今、自分が置かれているところがどんな状況であろうと、そこで主に真実に歩むなら、主はそこから想像もできない導きを取り出し、私たちを豊かに祝して下さるのです。ボアズ、ルツ、ナオミは困難の中でも主の摂理を信じ、その翼の下で慰められ、このように歩むことができました。私たちも主を信じるゆえに自分のことだけでなく、他者をも顧みて歩むことができる幸い、神を愛すると共に自分の隣人・家族・兄弟姉妹・周りにいる方々を愛して歩むことができる幸い、そしてその歩みを通してさらに主からの豊かな祝福にともにあずかって行く歩みへと進んでまいりたく思います。